

もわきかたくて過ゆくは、賀茂の神垣ちかき普賢堂の僧衆に、ちからを合
て造營の次、ねはん經の箱の底に、下紐と外題にある雙紙を見るに、明神の
あたへ給へると、懐中してかへりけり、抑光源氏の物語の心見解なは、此抄
にをよふへからず、一條禪閣、宗祇などのもてあそひ給はぬにより、講釋な
と絶たるへし、系圖は逍遙院殿あそはしけり、つれづれのまきはしに、御
覽あらん人々、猶あやまりをあらためらるへし、

天正十八年初冬に、書寫の功をはりぬ、沙彌半醒、

此物語のはても、源氏夢の浮橋の面影也、

少年と書そめて、残おほくかきとめたり、四冊を全部も心あるへし、はか
りかたし、後生の人しるさるへし、

天正十九年三月九日

臨江齋 法眼紹巴

狭衣文談

〔狭衣文談〕

此狭衣物語ハ、紫式部カ女大貳三位筆作也、源氏物語ハ一條院寛弘初めに
作れりとか、此狭衣ハ寛弘より三四十年後に作スト云フ、大貳三位ハ後

一條院後乳母にて、一條院后上東門院御堂關白道長公之御女、官女也、上東門院ハ後一
條、後朱雀兩院御母后也、古今傳授之書ニ、定爲法印ノ云、此物語者
祐子内親王前齋院ノ仰ニテ作也云々、

大貳三位系圖

良門閑院右大臣
冬嗣公六男 利基左中
將 兼輔堤中
納言 惟正刑部
大輔 爲時越前
守 紫式部
母ハ攝津守爲
信女、賢子云、

此紫式部、左衛門佐宣孝ニ嫁、産大貳三位、
此物語ハ人王六十六代、帝一條院に比、書出し、狭衣ノ御父堀川殿ヲハ九
條殿右大臣師輔公より三代、後胤太政大臣忠義公ヲ堀川殿に比シ、今上ヲ
ハ狭衣ノ大將に比シたり云々、

凡此物語ハ源氏物語ノ面影也、中比一條禪閣など賞ひ給ハぬにや、講尺な
とも絶たりとみゆ、然れ共系圖ハ内府逍遙院考へをかしめたり、され共本
の差異ある歟、少々相違の事あり、舊記ノ系圖を改め、又一本記之畢、
抑此物語は、往昔より異本まぢくにして、くたくしく紛れたる事のみ
おほし、然るを下紐にそのことほりを糺すといへと、愚耳にさとしかたき
所おほく、且又義理のたかひめなと粗みえ待れば、是を糺しあかさんと、と

し月心にかけ侍るに、逍遙院より聞書のものとして、一とをり亡父か函の底に残りとしまりたるをみいて、闇夜に灯をえたる物から、かねて又聞き侍りける抄物を、取あはせて、物語の詞を残らす書つらね、その義理をこまかにしるしつけて、狭衣文談と名つく、是又他見のためにするにはあらず、予か獨嘯となさんの心にて、時々閑暇に是をうかひて、今と後との愚意を、又かゝむへき也、寸志なを僻案あり、もし後見の人用捨して、了簡し侍へきならし、

文祿三年季秋日

桑門

狭衣目録
並年序

〔狭衣目録並年序〕

本〇刊

〔刊記〕狭衣の年序は、一のまきは三月より九月までの事あり、二まき同しき年の冬より書そめて、二ヶ年の春を経て、八月に嵯峨院ありぬさせ給ふへきあらましの時に、一のまきにて位につかせ給ひてより、治世二十年とあり、此時後一條院に位をゆつり給ふて、又の年の冬十一月までをしるす、三のまきはあなしき冬十一月よりの事ありて、年をふたつこしての十一月までをしるせり、四巻はあなしき十一月より又六たひ年をこし

狭衣物語抄

ての八月までにてをはりぬ、四巻の帝は今上也、されはかきあらはせる所は三代の帝、年は十二ヶ年也、此うち二巻に嵯峨院のあらましの時はたとせ世をあさめ給ふとある詞によらは、すへて二十九年の春秋の事といふへからくのみ、承應甲午季夏比東京黄臺山釋切臨^{みそ}扱之、

〔狭衣物語抄〕

〇坤 帝國圖書館本

此物語諸本不同、不辨何是非、只集多本就多分、聊需其理而已、本歌本説等多未能考、願先達之好士俟補之矣、

天和二年林鐘上旬

法眼
兼壽

狭衣類語

〔慶長以來諸家著述目録〕

和學家之部

小山田與清 狭衣類語

狭衣入紐

〔慶長以來諸家著述目録〕

和學家之部

河村秀根 狭衣入紐 四

狭衣物語校註

〔慶長以來諸家著述目録〕

漢學家之部 上

岡本保孝 狭衣物語校註 三

狭衣祕訣

〔辨疑書目録〕

第十五書寫本書目

雜書并物語類 狭衣祕訣 一册

狭衣繪卷

〔明月記〕

貞永二年三月廿日、甲子、天晴、〇中

日來撰出物語月次、十二月、不入源氏并狭衣、於歌者拔群、他事雖不可然、源氏別被書、近日此畫圖又世間之經營歟、

補遺 第三編之二 寛治六年二月

〔古今著聞集〕

十圖

後堀河院御位すへらせ給て、内大臣の冷泉富小路亭

にわたらせ給ひけるに、天福元年の春の比、院藻壁門院の方をわかちて繪つくの貝おほひありけり、大殿攝政殿女院の御方にそおはしましける、一方にしかるへき女房達四五人はかりにて、日かつきには及さりけり、先女院の御方負させ給て、源氏繪十卷たみたる料紙にかいて、色々の色紙に詞はかゝれたりけり、能書の聞えある人々そかゝれたる、からの唐櫃になん入れられたりける、御妬に院の御方御負ありて、小衣の繪八卷、又さまゝの物語ませて四季に書て、一月を一卷に十二卷にせられたりけり、料番と葉源氏の繪のことし、其外雜繪廿餘卷あたらしく書出して、おなしくからの櫃二合に入られたりけり、あはせて三合也、又風流の繪など、小衣の繪に入て、くはへられたりけるとかや、○下

後堀河上
皇狭衣繪
卷八卷
畫カシメ
給フメ

〔訂正増補 考古畫譜〕

五部

狹衣物語繪

八卷

畫飛驒守光秀、詞伏見帝宸翰、

補、倭錦云、土佐光秀狹衣、詞伏見院、

狹衣物語繪

躬行曰、伏見天皇文保元年崩、^{三五}光秀刑部大輔吉光男元亨頃人、或云、嘉元中、

補、真頼曰、狹衣物語殘缺一卷、摹本博物館にあり、但畫工不詳、詞書筆者は卷尾に伏見院と見えたり、

補、又曰、光秀の畫の狹衣は、明治元年五月の亂に、東叡山にて兵火に罹りたれと、こゝかしこ焦れたるのみにて、みなからは焼けす、今は卷々わかれて、諸家にて藏せり、

補、四郎曰、本書一段東京帝室博物館に藏せり、
補、同 一帖

補、四郎曰、京都西本願寺の藏にして、土佐光起の筆と傳へたり、頗る精密の畫なり、

狹衣物語扇面繪

土佐系圖云、狹衣物語扇面十三枚、光信畫之、

補、古畫目錄云、狹衣物語繪十三枚、光信、

〔明月記〕

建永二年五月十六日、天晴、入夜大雨、狹衣歌可書進由、有仰事、未時、

補遺 第三編之二 寛治六年二月

狹衣物語
扇面繪

後鳥羽上
皇定家ヲ
シテ狹衣

歌ヲ書進
メシメ給

實隆狹衣
ルノ能ヲ作

補遺 第三編之二 寛治六年五月

一〇八

即馳筆、秉燭持參、付清範、

十七日、天陰略中、又給狹衣、御點書進之、

〔實隆公記〕

文龜三年三月廿七日、甲午、雨降、伯忠當主二位來臨、勸一盞之處、觀世小

次郎來、今夜於室町殿可有猿樂、先年予所作之狹衣之能、今夜初可施其曲也、
伴能之内不審之事等尋之、經年序之間、大略忘却、雖然大概愚意之分示之、伴
歌物之内兩三曲記之、尤有興、慰雨中之懷了、

九月十九日、癸未、天晴、有和氣、略中

西下刻參室町殿、依先日内々仰也、略中、入夜初夜、被初猿樂、依召參入、聯輝軒
師弟參給、略中、猿樂十二番、

狹衣、予新作之能也、此能可令拜見之由、御結仍、略腋
被用此能之由、被仰、尤畏存之由、申入了、略下

○五月十二日、最勝講ノ條、五七六頁、僧綱補任ノ前、

〔類聚世要抄〕

十一 五月五日、最勝講事

同曆記云、同六年、五月十日、依最勝講御請上了、

十二日、宮中最勝講被始行、證誠三人、大僧正良真、山座法印大僧都賴尊、別當、

結願

法印大僧都濟尋、權別當兼、開白講師、講師法眼覺信、律師實圓、山、賢遷、山、圓禪、山、隆禪、興、
延真、興、已講慶增、山、二、永緣、興、證觀、三、井、聰泉、永順閣梨、山、賢秀、公義、
三、永源得業、御寺、應覺閣梨、山、行俊得業、興、俊圓閣梨、三、範經々々、三、定圓得業、
興、經尋々々、興、

十六日、最勝講結願了、今日有僧事、如例昏、

〔類聚世要抄〕

十七 十月十日、維摩大會始事

同曆記云、寛治六年、五月十六日、最勝講結願了、

○七月二日、上皇、金峯山御幸ノ條、五九九頁、熊野金剛藏王寶殿造功日記ノ前、

〔江都督納言願文集〕

二院 院金峯山詣

敬白

有種々佛經等

以前善根、旨趣如右、夫金峰山者、金剛藏王之所居也、初在西海之西、乘五雲而
飛來、今峙南京之南、掩一天而利益、伏惟、握搖圖而幾日、心馳於寶龕之風、遁北
闕而七年、思切於南山之月、方今自初夏之末、及孟秋之半、斷葷腥、致潔齋、遂出

補遺 第三編之二 寛治六年七月

一〇九

御願文

一日ノ齋
會ヲ排キ
多年ノ素
誠ヲ遂グ

萬乘ノ尊
ヲ降リ自
ラ千仞ノ
嶮ヲ攀ゾ

無何之郷、步向不測之路、履洞雲攀嶺風、風雲之感暗至、藉山月、酌澗水、々月之應自成、即排一日之齋會、以遂多年之素誠、讚佛乘、轉法輪、長寄不退之車矣、七比丘、百羅漢、新施無漏之衣焉、以增藏王之威光、以添金峰之照耀、况亦鑿牙分霰、供養於一千之雪頭、狼跡逢秋、賜與於五百之夏衆、仰願、以此功德成就七地、壺中之天、冰雪膚潔、洞裏之地、煙霞影閑、至彼上臺之長生、久視中圍之除病、延命者、一生之望、尤唯在斯、於戲奇巖怪石、絕頂長坂之逶迤也、寸步猶難耐、神祠靈社、雷澗龍鷄之幽邃也、多揚以易迷、非宿善開發、往因誘引者、誰降萬乘之尊、自攀千仞之嶮乎、十善重薰、兜率之內院無疑、一稱不捨、慈氏之下生、豈隔、始自追隨之紫衣、至于荷擔之黔首、依一緣之薰修、被二世之加護、乃至法界平等利益、敬白、

寬治二年七月十三日

太上天皇

講師宣下

〔類聚世要抄〕

十七

十月十日

維摩大會始事

同曆記云、寬治六年、五月十六日、○中今日有僧事、如別、維摩講師宣旨被下行

○十月十日、興福寺維摩會ノ條、六七四頁、三會定一記ノ次

同辭退

緣

八月廿八日、維摩講師宣旨被下忠範、

九月廿三日、忠範辭退講師了、

廿四日、講師事被仰下、

廿五日、申時開講師事、了即參、

十月九日、今夜詣講堂、登高座始了、今日受請遣了、

十日、勅使左中辨、季仲、俗別當、今日下向、又今日渡講師房了、彼房六七兩房也、

十五日、今日參辨、客房、并權別當、中、南、正別當、院、一、乘、法花寺僧都、楡皮、大安寺僧

都、大乘、濟恩寺大僧都、新、院、學頭律師、新、院、等歸了、今日著講師禮了、々々出也、

今日重裝束、侍從、三位殿、被物、大納言殿、

十六日、今日歸著一乘院了、

○年末雜載、神社ノ條、七〇九頁、

〔類聚世要抄〕

九

四月九日

春日八講始事、春季、

同曆記云、寬治六年、十月、今日始參御八講了、

補遺 第三編之二 寬治六年雜載

春日社八講

勅使

補遺 第三編之二 寬治七年正月

同四年季頭

十三日季頭慶助、東門房得業也。

〔類聚世要抄〕

十

四月十五日

觀禪院三十講事自朔日始之、自四月一

大曆記云、寬治六年(四月)十二月、參觀禪院、爲興隆也。三十講事歟、

○年末雜載、賣買ノ條、七四二頁、

〔野坂文書〕

○安

品治光延解 申沽度進相傳水田事

合壹丁

在同郷木垣村

直官米十石濟在判

四至本券面在、

右田依有見直用、限永年丹治部近垣所沽度實也、爲後日新券以解、

寬治六年三月十日

品治在判

重行加了、

寬治七年

○正月五日、敍位ノ條、七六〇頁、中右記ノ次、

〔夕拜部類〕

○敍位儀

右御記

御前議

同七年

正月五日、癸未、早旦著束帶參殿、午剋殿(備實)下令參內給、可有敍位議也、於

南弘庇頭

辨被內覽申文等、次下官進內覽申文、次奏覽、畢於晝御座擇之、取目

錄申文等、盛御硯管蓋、申刻令奉仕御裝束、一加除目儀、(備通)此間內大臣令

參右仗給頭辨奉仰、々可被行敍位議之由、及于昏黑供御燈、次頭辨奉仰、令藏

人典藥助爲宣召群卿、次殿下出御殿上、次內大臣以下相率參上弓場殿、(立藏)

內大臣先令昇殿上給、次殿下、內府令參御前給、(先令著大臣座、兩面給、內)

大納言、中宮大夫、治部卿取管文參進置御前、次著座、次依天氣殿下起座、令著

御前圓座給、(內府令下)納言以下起座、次內符依殿下御氣色、令著御前圓座給、

(先令著最末圓座給、)次勅仰之後召人、藏人兵部大輔通輔參上、候執筆座後、

子、召續紙、通輔歸出持參續紙、(紙屋紙續八枚二卷、)先候執筆座後、

入自當間、就執筆座後、右方獻之、取空管退歸、次被敍始之後、執筆召右大辨、被

仰可召院宮御申文之由、大丞於殿上取集御申文等、被持參、先是居火櫃、次居

衝重、此間民部卿召左少辨重資、被召諸國文書、(肥後、)次召切燈臺、(宰相座、右中)

辨師賴朝臣、左少辨重資持參硯并文書、左大辨讀肥後國帳、(前司、)至于交替欠

補遺 第三編之二 寬治七年正月

一一三

封租抄

入眼

條、注載以國司公廨填納之由、民部卿被難云、西海道以公廨不可填交替欠之由、有起請官符者、仍以辨被尋問官、申云、雖有起請官符、近代如此、仍爲流例者、上卿被奏事由、依近例可被裁許者、讀畢定文、皇太后宮權大夫公定卿書也、云封租抄、左大辨難云、西海道無封戶、不可有對租抄者、仍停之、被書改畢、執筆召頭辨、被仰可召入內、一加階勘文之由、即以被持參、柳筥次右大辨讀飛驒國帳、前司實、帳面作填交替欠之由、民部卿被難云、彼國式解由國也、然者不可有交替欠者、召辨被尋官、申云、帳失錯者、仍不被讀畢、子刻敍位畢奏聞、次執筆召右衛門督給敍位、於御前給歟、不見其儀、右衛門督於殿上被披敍位、次公卿退出、殿下出御、右衛門督於右仗被行入眼事、頃之參弓場邊、令下官奏白紙位記、納言三合、下官人取、奏聞畢返給、仰云、令請印、次請印畢被覆奏、仰云、令次第、々々之後覆奏、式部

〔殺位尻付抄〕

○京都御所東山御文庫

例敍

侍醫

〔朱書下同〕寛治七年 二條 從五位下 安倍朝臣盛親 侍醫

典藥允

〔寛治七年 二條〕從五位下 惟宗朝臣助言 典藥允、江記云、不注醫道、伴朝臣經俊 典藥允、

勸賞

行幸賞付行

〔寛治七年 二條〕從二位源朝臣俊實 行幸大原野賞、江記云、尻付依神位初例被同藤原朝臣基忠 行幸春日賞、

○正月八日、御齋會ノ條、七六八頁、東寺長者補任ノ前、

〔類聚世要抄〕

四 正月八日 御齋會事

大曆記云、寛治七年、正月四日、爲明後日上洛出門花嚴院、

大僧正御齋會講師事

六日、依勤御齋會上洛、著從五條北、從大宮東、大宮西家、頼末々家云々、

八日、大雪止之後、未時許渡大極殿、御前六人、後車講師房、大納言殿來給云々、

九日、内殿御使甲斐前司藤原盛實來也、

補遺 第三編之二 寛治七年正月

覺信上洛

覺信奈良
ニ下向

十一日、行事辨藤原有信、左少辨兼左衛門權佐來也、但依威儀供之間、從戶許返了、十四日、勸學院等儀如例、行事辨來對面也、右大辨被來之、會後參内、但依法眼立座、僧綱之列皆端、僧綱座立著論運之床、表白等作法如常、但三衣箱并座具不持之、其間有議也、十七日、下向車也、權別當御房下向給了、

○正月十九日、中宮ノ院號ヲ定メテ、郁芳門院トナス條、七九一頁、前、兵範記ノ前、

〔院號定部類記〕

○三之四 彰考館所藏

郁芳門院 白河院第一皇女、母中宮賢子、京極大廳女、實顯房公女、諱姫子、

寛治七年正月十九日、丁酉、有院號定、以中宮職爲郁芳門院、早旦後房左大臣以下

諸卿參仕座、被下宣旨之後、相率被參彼院、

左大臣宣奉勅、中宮職爲郁芳門院、止進屬爲判官代、主典代者、

寛治七年正月十九日 大外記兼博士主稅助清原公光

宣旨ヲ下
ス中宮職ヲ
停メ郁芳
門院ト爲
ス
年官年爵
舊ノ如シ

年官年爵如舊、外記、
左大臣宣奉勅、郁芳門院年官年爵如舊奉宛者、

寛治七年正月

清原真人奉

左中辨藤原朝臣季仲傳宣、左大臣宣奉勅、郁芳門院御季御服宜如舊奉宛者、

寛治七年正月十九日 左大史小槻宿禰祐俊奉

左中辨藤原朝臣季仲傳宣、左大臣宣奉勅、郁芳門院御飯宜從停止者、

寛治七年正月十九日 左大史祐俊奉

左中辨藤原朝臣季仲傳宣、左大臣宣奉勅、郁芳門院御封雜物等宜如舊奉宛者、

寛治七年正月十九日 左大史祐俊奉

經傳
帥大納言

寛治七年正月十六日、甲午、左衛門佐盛長爲殿使來云、中宮院號事近可被行

云々、隨可有立后事、而相尋日次之處、二月吉日、當重復日、仍相尋先例、藤原朝臣、忠仁、公、貞觀六年正月、爲皇太后宮、復日、

十九日、丁酉、依有陣催子終參内、先上達部兩三輩參入、少選左大臣被參入、内

御季服舊
ノ如シ
御飯ヲ停
御封雜物
舊ノ如シ

院號ヲ定ム

匡房ノ説

通俊ノ説

經信ノ説

勅証ヲ仰

グベシ

郁芳門院

卜定ム

院司ヲ補

院ニ於テ

饗饌アリ

大臣(條)被參、博陸(京師)殿下參給云々、今日不參公卿大納言、宗俊、別當、俊實、宰相中將二人、仲實、此外皆參、左府何使頭辨被申參入之由、隨被仰下云、中宮可有院號之事、而御所者大炊殿與六條院也、二箇之間何様可申乎、又上東門院者追東三條院例、陽明門院者追上東門院例、所被遵行也、此間何例可被遵行乎、者、左府被示合座中、被召大夫外記定俊被尋問云、東三條院上東門院、陽明門院、令立院號給之間、若有相替事乎如何、答申云、相替之事殊不何也、次左府被示可定申由、右兵衛督發語之、當時御所六條也、可令申六條院歟、左大辨定申云、可申郁芳門院、父子皆吉候者、次右大辨定申云、郁芳門院頗云惡候歟、可申六條院歟、自爾以上或同左大辨、或同右大辨、予申云、兩箇可隨勅定、但六條院申馴候歟、就中寬平御時有申六條院號、被追從何難候乎、左府以頭辨被申各所定申之、依頭辨申左府云、二箇間猶以何號可申乎、人々之申旨大略如初定申、至于今可隨勅定、此間予依召參殿上、博陸有被問仰事等、次頭辨參院、良久後來陣云、停中宮職、可申郁芳門院、停內膳供膳、年官年爵如元、以亮可爲別當、以進可爲判官代、以屬可爲主典代者、次殿下參院給云々、次左府以下相引參院、雖可有出立儀、日暮者中殊無此儀、先於院有饗膳事、殿下以下被著座、左府被爲院例云々、仍之歟、雖曳轆無此儀、

家朝臣申云、史持來宣旨候者、殿下被問人々云、若可申此由事歟如何、人々申

先例不殊覺之由、仍被仰云、令候々者、饗膳已了、予退出、

廿日、戊戌、今日雖聞訴院有事之由不參、三ヶ日云々、

廿一日、己亥、此三ヶ日之間上達部皆參云々、予耻老爛、所不參會也、

廿二日、庚子、大外記定俊來向之次、尋問一日院間宣旨事、答云、被仰外記、停中

宮職、可爲郁芳門院、停進可爲判官代、停屬可爲主典代、年官年爵如元、被仰官

云、可停內膳御膳、御封雜物如元、合一事被仰下之様覺候、不慥覺候也、可尋其

外記史共參彼院、令獻宣旨事、二條院號時、故大宮右府偏被仰官被失歟事、

次語云、外記史共參彼院之獻宣旨之後、無左右仰、仍退出畢者、二條院號之時、

故大宮右府偏被仰官云々、被失歟、

廿三日、辛丑、新院明後日有殿上始之事者、可令參給殿下仰也、

廿四日、壬寅、自新院被催云、明日可有殿上始、午刻可參者也、申參由了、

廿五日、癸卯、東帶午終參院、東面、先是治部卿別當、左大辨殿被候東廊、小選左

大臣被參入、人々多參、又關白自西面參入給、東廊南面大盤居饗、相交合子、殿

左右大臣、內府被參、內所被定下判官代、殿上人、又書簡、有頃殿下參內給了、是

女御依可出給事歟、殿下出給之後、左府以下著大盤、被始饗饌、有三獻、頭辨、右

殿上始

大辨勸盃、次參内、東面、

江記院號、三箇日儀、殿、上始以後事、

寛治七年正月十九日、丁酉、○中略、寛治七年正月十九日、條所、收江記ノ文、下同、

院號目錄法

院號目錄法事、

絹六疋、

左兵衛尉一人、志一人、府生一人、各疋絹、

右兵衛同色目、同前、

麻布十八反

左兵衛番長一人、四段、府掌一人、二段、

右兵衛色目同前、以上啓陣、

膳宿女官

采女六人、四位一人、二位二人、五位一人、各疋絹、刀自六人、各疋絹、新成一入、疋絹、

以上絹十五疋

内侍所

女史二人、命婦一人、二位一人、疋絹、硯摩一人、疋絹、

水取三人、各疋絹、刀自一人、疋絹、主殿女官五人、各疋絹、掃部女官六人、各疋絹、

以上絹十九疋

油守五人、各布二反、今良二人、各布二反、下七人、各布二反、

以上布廿四段

主殿寮啓所

允一人、疋絹、屬一人、同、下部八人、各布二反、

内膳司

御炊男一人、布二反、

主水司

下部一人、布二反、

并

絹冊二段

麻布六十二反

之外追別給

髮上三人、五位二人、各疋絹、六位一人、疋絹、

補遺 第三編之二 寛治七年正月

寬治七年正月十九日○中略、前掲江右能時範

寬治七年正月十一日己丑今日候内、及于深更、來十九日中宮可令蒙院號宣旨給之由、豫有議定、先令候始殿上臺盤簡等、大夫奉仰寺奉之、參宮召亮爲家朝臣下知之、今夕宿、

參會ノ公卿

内裏儀

十九日、丁酉、天晴、未刻、殿下令參内給、左内兩府、民部卿、源大納言、中宮大夫、新

大納言、治部卿、左衛門督、右衛門督、中納言、中將、新中納言、右宰相、中將、太宰大

貳、右大辨、左大辨、皇太后宮權大夫、右兵衛督、參著右仗、殿下出御殿上、以藏人

中宮停后位、可奉稱院號事、頭、左中辨、季仲朝臣、被仰左大臣云、今日中宮停后位、可奉稱院號、其間雜事可

或奉稱郁芳門議、或可奉稱六條院、或可奉稱陽明門院事、令定申者、僉議旁分、或申奉稱郁芳門院、或申奉稱六條院、且庶事可准陽明門

陽明門院例、依上東門院例、被行事、院例、被問、大外記、定俊、申云、陽明、即以頭辨被奏聞、先申殿下、次以同人被申太

停中宮職、可奉稱郁芳門院、上皇頭辨、歸參令奏御消息旨、次以頭辨被仰左大臣云、停中宮職、可奉稱郁芳

宜以進爲判官代、以屬爲主典代、年官年爵、御季御服、御封雜物如舊、門院、宜以進爲判官代、以屬爲主典代、亦年官年爵、御季御服、御封雜物如舊、但

但内膳御飯可停止事、内膳司御飯可從停止者、次左大臣召大外記定俊、被仰下院號、并年官年爵事、

召大外記定俊、并左中辨、季仲朝臣、仰件由事、次召左中辨、季仲朝臣、被仰御季御服、御封雜物、内膳司御飯等事、季仲朝臣退

出、召左大史祐俊、仰之、依先例、無御使、申刻、殿下令參新院給、次左大臣以下被

師實以下
新院ニ參

郁芳門院
下ノス

院號ヲ議

院司ヲ補

一獻 祿

院司奏慶

率參、右大臣、左兵衛督、三御裝束、儲寶儀、立四尺御屏風、其内二行對座、敷高麗端帖爲公卿座、施東西爲上、殿下御座在與、前、殿下御新机與大臣机、絕席、大臣机文、與納言机廿二座、殿下令著座給、此間、饗饌色目、同臨時容儀、豫以居飯、無粉熟、不被儲殿上人座、殿下令著座給、此間、先補院司一人、依臨昏黑、供御燈、次左右内三府以下、令著座給、次殿下召亮爲家朝臣、被仰云、爲別當、由爲家朝臣、降自南腋階、拜舞、還昇而候、重被仰云、權大納言源朝臣、權大納言藤原朝臣、加、新右近中將藤原朝臣、權大納言隆朝臣、權亮、可爲別當、行實、權大俊兼、少進、可爲判官代、下官依爲權大進、可爲判官代、先例不明、仍被仰下、當家、不待仰撤火炬屋事、國義經、佐伯貞義、屬、已上、可爲主典代、此間、炬屋可令撤去、而所司未被仰下、以前、左兵衛督陣、尉以下、并主殿官人以下、采女、女史、諸司女官等、賜祿事、無音撤之、不可爲例、左右兵衛啓陣、尉以下、并主殿官人以下、采女、女史、諸司女官等、賜祿、有差、此間、大外記定俊、左大史祐俊等、持參宣旨書、別當爲家朝臣、先、申殿下、仰判官代俊兼、以件宣旨書、令賜廳、不居、次一獻、近江守爲家朝臣、代、行實、取、瓶、次二獻、部、右大輔、通、勸、取、瓶、子、兵、羞、汁、物、爲、家、朝、臣、美、濃、守、殿、下、手、長、朝、臣、美、濃、守、行、爲、三、大、臣、手、長、五、位、大、夫、勤、仕、雜、役、云々、手、長、次三獻、新、中、納、言、成、宗、取、瓶、子、羞、汁、物、次、依、未、被、始、殿、上、地、下、大、夫、勤、仕、雜、役、云々、手、長、次三獻、新、中、納、言、成、宗、取、瓶、子、羞、汁、物、次、羞、菓子、次、日、着、薯、蕷、粥、次、公、卿、退、出、中、院、司、公、卿、以、下、申、慶、賀、朝、臣、啓、爲、家、次、判、官、代、等、率、諸、大、夫、令、撤、大、床、子、等、畢、

三箇日變
ヲ設ク

補遺 第三編之二 寬治七年正月

一三四

東三條院上東門院令蒙院號給日、有御遁世事、仍不被儲饗饌事
東三條院上東門院、令蒙院號宣旨給之日、有御遁世事、仍不被儲饗饌、陽
陽明門院御時被儲饌、由不分明、然而彼時有饗、由間有說事
陽明門院御時被儲饌、由不分明、然而彼時彼且、日有饗之由、間有其說云々、仍
今度有新儀、三箇日設饗事
宣旨書等、外記宣旨二枚
者、外記宣旨書二枚、一枚停后位奉稱院號、以進屬可爲
官宣旨書三枚、一枚御季御服如舊、一枚御飯、可被停止、雜物
件宣旨書、上東門院并陽明門院、外記史持參之由不分明事
被問祐俊之處、申云、持參之由有所見、然則不被啓件文、候判官代、傳取令下
廳也、

上東門院御時被加御封二百戶、陽明門院御時無此事、今日又無其沙汰事
上東門院御時被加御封二百戶云々、而陽明門院御時無此事、今日亦無其

沙汰、追可被仰歟、可尋、

第二日 公卿座饗膳如昨日事

廿日、戊申、刻參郁芳門院、儲公卿座并饗饌如昨、左右內三相府、大納言三人、
源大納言元大、中納言六人、治部卿、左衛門督、右衛門督、宰相六人、右宰相中將、
夫新大納言、兵衛督、新宰相中將、右三位侍從參上、一獻、四位大夫、蓋汁物、次二獻、皇太后宮
兵衛督、新宰相中將、右三位侍從參上、一獻、四位大夫、蓋汁物、次二獻、皇太后宮
勸盃、下官、次重蓋汁物、次三獻、右衛門督爲勸盃、次居菓子、薯蕷粥事畢、人々退
出、入夜參內宿侍

殿上始

第三日

廿一日、己亥、申剋退出、參新院設座并饗如昨、左右內相府已下參會、如昨、一獻、

次蓋汁物、二獻、新宰相中將勸之、藏人重居汁物、次三獻、左兵衛督勸之、少

廿五日、癸卯、天霽、早旦參殿、次參內、午剋參郁芳門院、今日依可被始殿上也、申

剋殿下參御、別當近江守爲家朝臣奉仰、令主計頭道言朝臣勸申日時、卯時、

先覽殿下、次奏院、次啓了、下主典代家國、先是寢殿東二棟廊、南面、從西第一二

間懸御簾、立御几帳、立御障子爲隔、從第三間以東五ヶ間爲殿上、南面御簾撤

之、北面懸御簾如元、其內敷滿長筵二行、對座敷紫端帖、以西爲上、東端、立臺盤

三脚、一、脚四尺、在上、絕、其東居炭櫃二口、良角立日給辛櫃、東妻切立御障子爲

隔、南端開之、東庇三箇間爲下侍、放東面御簾二行對座、爲紫端疊、東中門東廊

爲主殿、司宿殿上臺盤居饗膳、侍會居之、毛、萬壽例、先居合子飯、依主殿司未參口、以

被定昇殿并藏人等別當大納言書之事
饗云々、違今日儀、此間殿下令參院御方給、別當大納言、夫、大、同被候御前被

定昇殿并藏人等、大納言書之、次殿下出御院殿上、權大納言、夫、大、召別當近江

守爲家朝臣被仰下之、下文給、爲家朝臣退歸、召主典代下之、口召主殿頭公經朝

臣、令書簡并袋銘、令散位基親、令書簡、簡書樣如大內殿上簡、四位五位六位三

裏、別當判官代宗任也、但雖人在任爲別當、西刻左大臣、右大臣、內大臣、兩源大納

補遺 第三編之二 寬治七年正月

二二五

公經ヲシ
テ簡并ニ
カシム

言新大納言治部卿左衛門督右衛門督中納言中將左兵衛督新中納言右宰相中將左大辨右大辨皇太后宮權大夫右兵衛督三位侍從新宰相中將著殿上座殿上人一兩候于座末先是殿下出御萬壽宇治殿著御直衣令著饗給饗給御之故歟三一兩巡之後無勸盃殿上五位六位益送五位居汁物次三品宮給之故歟居菓子薯蕷粥事畢公卿退出此間立殿上簡令藏人掃部助高階遠實日給件簡事源藏人取之令覽御前次昇殿人等於下侍東庭令判官代俊兼啓慶賀拜舞畢昇殿次殿上侍臣等著臺盤盃饌之儀如何

簡袋銘并年月可被書改事
以侍所爲藏人所簡袋銘并年月可被書改歟如何今日無其沙汰云々

殿上人

以北築垣内西門爲御藏小舍人座立白木臺盤居飯云也

殿上人以下昇殿人云四位十七人五位十一人修理大夫俊綱朝臣内藏頭師信朝臣近江守爲家朝臣伊與守顯季朝臣左中辨季朝臣丹波守顯仲朝臣右中辨師賴朝臣木工頭隆宗朝臣右近中將宗通朝臣左近中將國信朝臣右近少將顯雅朝臣侍從宗忠朝臣右近少將顯實朝臣右近少將有家朝臣左近少將俊忠朝臣右近少將能俊朝臣散位師隆朝臣別當四位左少辨重資兵部權大輔通輔勘解由次官時範散位行實判官散位季房左近少將忠教侍從顯通侍從

藏人

實隆治部少輔能仲散位爲遠散位俊兼判官代五位左兵衛尉藤知信六位藏人

藏人

能遠朝臣子號九

掃部助高階遠實

蔭子藤原家保顯季朝臣子號九

蔭孫藤原盛輔盛實子號下

主殿司六人大支連歌美作少

主殿司六人主殿二郎千鳥少

郁芳門院御藏小舍人員數可尋

○二月十日郁芳門院院號ノ後始メテ御參内アラセラル、條、八〇九頁、公卿補任

〔院號定部類記〕

○彰之四 館所藏

右範 寛治七年二月十日丁巳天霽早旦參内申

刻退出入夜參郁芳門院今夕院號之後始所入御内也院司參上奉仕御所御裝束以寢殿西北渡殿爲御所以同北西渡殿爲臺盤所以北對東妻爲殿上以官侍爲侍所自餘不能委記晚頭別當近江守爲家朝臣奉仰令勘申御幸日時勘申御幸日時戊刻寄御車唐車於南階次大炊頭光平奉仕御反閑殿下右内兩府已下令扈從給納言以下騎馬前驅院御車副二人奉仕御牛廳官等副御車以檳榔毛爲

主殿司

御所御裝束

日時勘申

前驅

着御
輦車ノ宣
旨ナシ

一院并ニ
女院院司
及ヒ昇殿
人ヲ定ム

出車殿下令著宿袍給以下皆著東帶殿上人舉炬自東洞院大路北行自二條
無輦車宣旨上東門院院々號後始入給無之事
大路西折而行入御自北陣無輦車宣旨上東門院院々號之後始寄御車於御所
渡殿北面次人々退出頃之主上渡御御直殿上人候脂燭俄頃還御畢

一院

判官代基隆

昇殿師隆朝臣雅隆
仲宗盛長子

新院

別當治部卿左兵衛督右兵衛督師信朝臣
顯季朝臣宗通朝臣顯雅朝臣

別納別當季房侍所別當顯通

昇殿藤原
輔明

勸賞

勸賞事
十二日己未殿下參內給依新院可出御也先以頭辨被仰勸賞事於內府正五位下
藤原忠教
源顯通

○三月二十日上皇春日社御幸ノ條八六三頁
江記ノ次

〔春日社御幸記〕

錄伏見宮御記
五十所收

十日ノ文關ナク
三月二

冠纓黑褐布帶脛巾藁

沓等也

四人右史生伴

竝卷纓主殿允藤井有道
主計屬佐伯義保已上

竝束帶藁爲上不可然至御前者上藁可爲先次走馬十人舞人乘

之置平文移舞人左中將源國信朝臣無籠隨身四人小舍人童一人雜色八人

右少將同顯雅朝臣籠右大將隨隨身二人小舍童一人入旁下向シ雜色八人侍從藤原朝

臣宗忠無籠小舍童一人雜色八人右少將源能俊朝臣無籠隨身二人小舍童

一人不具雜色多被侍從源顯通籠右大部久定小舍童一人雜色六人少將

藤宗輔院地下內殿上籠殿隨身二人小舍童一人雜色六人侍從藤實隆無籠

小舍童一人雜色六人左兵衛佐源師時院地下內殿上籠殿隨身二人小舍人

童一人雜色六人藏人右兵衛尉源惟清無籠府隨身二人小舍童一人御藏小

舍人矢田部則季時々追前雜色四人藏人左兵衛尉藤知信無籠御藏小舍人

早部親輔府隨身二人小舍童一人雜色四人也

已上隨身等冠纓褐衣布帶者尻藁脛巾馬股狩胡籙弓御

厩舍人居飼各一人相副舍人二藍狩襖袴秋冬衣紺帷赤扇白合袴烏帽子

次公卿以下退撤圓座垂御簾衛府公卿等帶胡籙次大橋列立於寢

御幸路

郁芳門院
女房見物

行列次第

御唐車

東面北上、但或有不列之人、已剋寄御車、御々車之後、公卿前行、到西門乘之、其末頗斜、其末頗斜、但或有不列之人、已剋寄御車、御々車之後、公卿前行、到西門乘之、其末頗斜、但或有不列之人、已剋寄御車、御々車之後、公卿前行、到西門乘之、
 人、子乘之、馬副四人、雜色等不具、仍召官使部、十自東洞院北行、自院北築垣北、
 六條坊門南邊也、東行、自万里小路南行、備度新院自六條西行、自東洞院南行、
 前備後守、宅前有女房車五兩、是新院女房見物也、右府早參入被載、此中
 房十人、忽女、自八條東行、自富小路南行、至九條人々被留、大夫依可勤、明日、
 也、人々被乘車、內府、其行列次第見式并指圖、仍不委記也、
 忠、列於九條信經、但大略舞人以下、皆以下蔭為先、次左衛門陣三行、佐盛長、尉以下
 府生以上各二員、下蔭為先、番長、以下左兵衛陣三行、佐宗政、尉以下各二員、蔭
 十為先、番長、以下次侍從十二人、為先、蔭、次左右馬寮頭以下、道良朝臣、助清宗、右馬
 頭兼實朝、左助敦仲、元屬次公卿、御隨身、蔭、薄、蘇、芳、內府、次御隨身十二人、皆騎馬、
 史生馬醫、朝左、右、各員也、次公卿、御隨身、蔭、薄、蘇、芳、內府、次御隨身十二人、皆騎馬、
 如、恒、御代、舍人、武、元、未、上、之、故、也、並、左、蘇、芳、袴、右、黃、朽、葉、袴、白、張、袴、赤、扇、居、飼、各、一、人、次
 左右近陣、次左右將、右、顯、實、朝、臣、次、左右將、監以下府生以下各二員、并近衛各
 十六人、左右陣列、次御唐車、右、變、給、彩、毛、左、御車副八人、冠、纓、下、蘇、芳、袴、有、帶、單、青、
 白、袖、單、下、袴、諸、司、二、分、十二、人、左、右、行、列、左、京、屬、秦、忠、安、修、理、屬、中、原、行、則、內、藏、
 茵、脛、中、藁、履、屬、件、成、通、織、部、令、史、野、國、友、主、水、次、掃、部、屬、藤、井、季、通、持、御、采、女、
 令、史、賀、重、主、殿、屬、上、野、清、友、東、市、令、史、葛、木、季、忠、水、次、掃、部、屬、藤、井、季、通、持、御、采、女、

檢非違使

御衣辛櫃

祿辛櫃

師實車

令史海原典利、持、御、牛、飼、一、人、著、褐、衣、等、如、御、次、公、卿、別、當、一、人、經、實、次、小、舍、人
 童一人、裝、裝、牛、丸、為、利、弟、也、水、次、檢、非、違、使、左、兵、衛、尉、平、為、俊、長、二、人、衣、帶、弓、箭、看
 二次召繼廿人、左、右、各、次、四、位、別、當、頭、中、將、宗、通、朝、臣、次、師、顯、季、為、章、隆、時、判
 官代行實、基、實、季、安、仍、行、實、無、相、比、之、者、次、院、藏、人、四、人、也、內、除、故、障、之、輩、并、舞
 卅六人、許、也、外、次、主、典、代、忠、成、次、陪、從、十、二、人、次、殿、上、人、冊、餘、人、許、頭、辨、次、忠、康
 左、道言、右、次、藏、人、所、衆、左、右、次、御、膳、辛、櫃、四、荷、御、廚、子、所、預、二、人、敬、位、久、則、成、次
 膳部四人、左、右、舍、人、四、人、左、右、次、御、衣、辛、櫃、二、荷、次、廳、官、二、人、內、膳、令、史、佐、伯、助
 賴、舍人四人、布、衣、次、右、兵、衛、陣、三、行、佐、為、遠、尉、以下、各、二、員、為、先、蔭、番、長、以下、六、人
 夾之、次、右、衛、門、陣、三、行、佐、基、信、尉、以下、各、二、員、番、長、以下、十、六、人、夾、之、次、祿、辛、櫃
 六、荷、次、廳、官、二、人、大、炊、屬、笠、兼、成、大、舍、人、十、人、衣、步、行、也、布、次、武、者、所、卅、人、並、布、衣、
 但、之、中、有、官、九、人、左、衛、門、尉、平、季、光、藤、原、盛、重、右、衛、門、尉、藤、原、季、清、源、定、左、兵、衛
 尉、豐、原、章、成、源、行、遠、右、衛、門、尉、橋、貞、隆、左、兵、衛、尉、藤、原、永、光、左、馬、允、平、季、忠、并、帶、
 劍、次、關、白、殿、御、隨、身、四、人、騎、馬、次、御、前、廿、人、憲、成、實、邦、宗、兼、遠、季、綱、重、仲、六、位、四
 人、亮、同、佐、實、勾、當、源、盛、季、次、殿、下、御、車、檳、榔、毛、檢、非、違、使、右
 衛、門、尉、平、貞、慶、大、笠、相、從、次、雜、色、等、次、為、俊、郎、等、廿、人、保、呂、胡、不、錄、黑、鞍、あ、さ、良、し

裝束越後守狩衣袴下弓胡錄但馬鞍加賀守甲冑借物甲著者廿人步行綾
紺水旱紺腰巾舍人廿人裝束同上

以上二種守甲斐

次重宗子郎等十五人所衆也

自餘事等不具記

公卿以下ノ裝束

抑公卿以下諸司諸衛等皆如城外行幸裝束神寶供奉廳官四人大尾深沓結

一分之者不結唐自餘廳官經光永則則元國季等束帶件外皆衣冠爲諸衛案

主之輩著褐冠布袴餽餽等間立明廳官十二人延行則元資則經元經則國末

信則到鴨河間檢非違使忠重行橋事在此處編鵜船爲船橋而爲鵜飼被切取

由所愁申也大略不立棧棹之間水入船沈入歟乘船渡之馬自水渡後聞上到

宇治間令馬副張口依見物人多也上皇亦令調前後行列給中納言中將治部

卿并親昵人々道良能俊皆於大僧正假床羞小餽歟予到祝茵邊羞湯漬渡木

津川形也馬以舟渡人々皆如此御所料白瑩假屋形以諸衛狩有船寄上皇令

度給間師忠雅實家賢等候御船殿下御船只如形白瑩予自般若地向奈良爲

早到宿所也申終到東大寺前自中御門前程令馬副張口光季等立於山階東

宇治ニ著御

木津川渡御

著到殿ヲ御所トナシ同舖設

御門三門之中可奏音樂之料光季懸到南御門南小門下馬伏於東院西房賴

殿已講房也弟子長殿者春聊羞小餽忠範已講暫休息今日々太殊上皇過奈

良坂之後令調行列給聞公卿等過騎馬參社頭大略見御裝束六間二面東并

庇著到殿爲御所南庇七間并東庇二間御簾西庇一間母屋又懸亘御簾想母

屋庇也間内并南簀子差筵東庇爲御禮所西二間之東邊立御屏風自東母屋

西三間内懸壁代四面立廻四尺御屏風南壁代其内敷御座三枚懸御

爲夜御所南庇敷高麗三枚東庇敷高麗緣二枚第四間庇敷高麗一枚件屋坤

南北行木工寮立五間屋一字檜皮葺無葎北與地一齊南有三尺許其内敷筵并高

麗帖立机設簾播磨其四面引幔御所四面去屋三丈許引

纈纈幔但南方去屋十丈許但西南庭南邊立十間片庇屋北高懸伊與簾卷之

打腰長押上覆幔長押下同引幔其左右妻切懸南邊引幔其屋西頭立大鼓一

面有火爲打餽餽之所御所戌亥角去屋數丈東西立五丈幄一字爲殿上人座

公卿屋坤方東西行立五丈幄一字爲舞人陪從座其西立同幄爲侍臣座其西

相去五許丈南北夾道次第立諸衛幄左在北御所北立三丈幄爲御厨子所馬

場北邊立屋三字一字御車一字殿アラン

著到殿敷板敷并高欄天井等修理職所課也行幸時假作北庇今度不作之

東遊

御拜

幣各倚於案南方、但率川御幣先付社司之後、可遣彼社云々、此間殿下被仰云、御拜於何處可候哉、式如何、申云、於中門前庭可候也、殿下被仰、御庭猶如何、申云、諸社皆於舞殿所候也、以顯季朝臣被問社司、申云、當社之例皆於庭被奉幣、更无舍中奉幣之例、前日沙汰時、於庭可候、由所被定也、殿下議定給曰、庭猶凡也、但神殿方地太高、幣殿已早於此中令拜給、更不可無便、猶於幣殿可候者、仍上北面御簾母屋、其內供御拜御座殿上、此間可傳獻幣、公卿別當被相議、此社例以氏人爲宗、仍權大納言可執之、而被退出、然則候座之別當經實卿也、非別當中納言中將與別當參議誰人可執乎、召予被議、申云、納言可宜、至別當者、雖忽被仰、有何事乎、殿下仰云、可奏其由、予自屋北砌著履、參進於砌、奏事由、仰曰、關白可參御前、可相議者、返來申其由、即參入給、其後歸出、中納言被於北砌西第二間、跪傳取幣、先暫解胡錄、繩等、乍著履、跪於御座間、長押獻之、御拜兩段、再拜、訖後返給、中將執之、於初處返給顯季、々々執之、付神主時經、々々歸入、申祝之後、歸出、申返祝、跪於大鞍、次御幣并神寶等昇出、神人昇之、神祇、此間內府參入給、次廻神馬、爲神馬、先并引廻瑞垣、惣八、令御隨身厚季計度數、殿下被仰曰、長廻、次神馬引入於中門、走馬引出於門外、爲違例、體舍人相與、舞人引之、頗、次有東

俊房陪從
テニ加ハリ
舞テ求子ヲ

遊、陪從等立於幣殿北、此間殿下被相議、公卿等明日還遊、可立加舞人、而依國忌事、已今夜皆可被行也、抑寬弘中宮門上、參御大原野社之日、入道殿加舞人、舞給、神前也、然則大臣非無舞例、當時所候之公卿可舞之人三人、師忠、雅實、中一、人不足、內大臣立加如何、但彼例若慥覺之哉、予申云、縱雖不慥、又有何事乎、野宮、大臣御前臨時樂依孫纏頭而舞、九條大臣菊會依獻御、搥頭而舞、大入道被相撲後、日給祿、翻袖小舞、故源右府臨時樂依孫纏頭而舞、更有何事乎、院聞食此議、被仰曰、縱雖無先例、立加而舞、於彼內府身可無便、歟如何、關白申給曰、更不可無便、殿下又被仰曰、小年之時、不奉仕舞人、仍舞更不覺云々、仍遣御隨身告遣於舞所曰、駿河舞了、可相待公卿、立加也、次予又申云、公卿加舞之時、堪絃歌公卿立加陪從、今夜某人、不候、公卿殿上人皆在宿所、左府被申云、雖無所能之人、搥笏立加是先例也、云々、內府、著半臂給、或由殿下被問申、著給、起座經幣殿北、加求子列給、中宮大夫、源大納言、中納言、中將、帶弓、同被立加、共舞如何、由殿下被尋、予申、左府搥笏立加陪從中給、但求子也、六位二人不舞、云、如此、出□時、更不可懼、十二人例、有何事哉、云々、賀茂、春日、祭之時、近衛舍、此間殿下臨北長押、而見給、覽之、而予下地居於直會殿砌、而見之、在西舞、間依、不可候、堂上也、上滿、舞了、復

神樂

座、抑槐門蓮府或為陪從、父子共舞、又是所未曾聞也、希代之儀誠為帖觀、如在之禮定感神意、次有神樂事、令敷座於中門外瑞垣前、主殿允有道燒庭火、應官敷神樂座、竝北上東西對座、各三行敷之、如恒、上、南、舞人來著之、先可居饌、歛、被尋左府、被申云、臨時祭時先居之、殿下被仰云、內侍所御神樂時、試陪從之後、還著時居之、殿下又被仰云、公卿座可居衝重、歛、予申云、所設也、然而依無可居之仰、遂不居之、予申云、日吉御行如內侍所儀、仍舞人以下先著之、人長兼方、座在北、起、行、事先仰主殿司御火可白奉仕、次仰掃部寮膝突給、次召笛、家綱、次召篳篥、忠通、次召琴、邦家、次召歌、先知、忠、次人長退後、舞人以下著座、次居衝重、藏人所役之、次勸盃被催、人々退下、所候之人、宗仲朝臣、為家朝臣、基隆、家俊等也、仍二獻、初獻四位二人、二獻五位二人、瓶子被催三獻無人、仍拍子、召人、厚、利、節、方、床、藏人所取之、但人長召人等、官役之、在、北、重、簾、韓神訖又一獻、用前、一次人長起、召才、男宗忠朝臣也、次召家綱、不散樂而退、仍人長三度召之、終不散樂、次召知定了、此間予申云、社司祿可給、而勸賞後可宜、院仰曰、次第如何、申云、神樂之後也、仰曰、此間可被仰此旨、殿下召子被仰曰、社司賞其數幾許哉、申云、石清水轉任一人、賀茂下惟季一人、上社成繼一人、日吉社成任一人、仍一人可賞、有勅定、頭辨給左府、々々便被仰頭辨、々々

勸盃

神主時經
二加鉞

經幣殿南到直會殿東砌、南、第三、跪召神主時經、入、候、庭、即仰鉞一階、由時經退間予仰曰、可舞踏時經如形舞、退了次令給神人祿、各自禰、侍臣等執之、到中門下給之、邊、昇、立、直、會、殿、南、神官等列立拜舞、或以北可為上、而、訖退、但神人祿布等仰為家朝臣、惣今度之到、(脫、ア、ラ、ン)其駒間、給人長腰差、役、之、舞人陪從等祿、五位以上、白、時、從、等、給、之、須殿上人給也、行、事、為、家、朝、臣、失、也、前、日、議、曰、明日於帳座給之時、侍從等給之、臣、可、取、而、今、日、於、御、前、給、之、仍、殿、上、人、可、取、之、為、家、朝、臣、何、可、膠、柱、乎、又令給召人祿、正、給、之、次儼人等向馬場殿、可馳御馬、曰仰之、此、間、依、無、朝、臣、仰、之、也、次樂人亂聲、次左々將監、伯、光、季、振鉞、次右々將監、多、資、忠、振之、次相共振之、次左万歲樂、六、人、次右延喜樂、六、人、次左賀殿、六、人、此間殿下被仰曰、可有光季賞、龍王誰可儼乎、予申云、若光則歟、次賀殿終間有勸賞、左府起座居第二間北長押下、召光季被給之、光季乍儼裝再拜、次起應樂、頗舞一節、美、也、次再拜而退、雖被略諸賞、光、季、堪、能、之、者、年、次右地久、六、人、次左羅陵王、一、人、光次右納蘇利二人、時、方、公、忠、以、上、兩、舞、事訖還御、此間奏退音聲、此間為家朝臣來曰、仰云、取寺司祿事誰人乎、申云、公卿可取歟、日吉御幸座主祿匡房所執也、次殿下々直廬給、仍又參入、其儀御社南面西鳥居內、興福作黑木五間、(寺、院、)四面卯酉寢殿一字、其西三間、一面卯酉渡殿一字、其西三間、子午廊一字、竝以黑木為柱、梁、桁、上押、

勸賞

還御

高欄板敷、昇指、垂木、木舞、持風、萱負、天井扶持、不黑一木物以松皮葺之、以檜蘆蔭爲
 天井、但寢殿母屋東第一間并東庇垂御簾爲關白御寢所、其母屋隔、皆是絹障
 子、圖、畫母屋西四間并南西庇放出、令竝卷簾、副母屋障子、立亘屏風、母屋四間
 內敷高麗帖、(爲號也)殿下御座、西向、大臣以下對座、竝以朱高坏儲膳、殿下御、大臣料、四
 本、納言以下料、居之、三行交西渡殿母屋與北庇隔以障子、障子、戶、同母屋居殿上
 人料饗、高坏西子午廊南妻有昇指、庭前南寄有餽餽十間片、庇屋、前儀、其西立
 大鼓、有火公卿座定一獻、殿下執被下之、左府、源、大納言、權、大納言、權、大納言、內、此間奉仕童
 舞、先万歲樂、六人、次賀殿、六人、二獻、殿下被別當賴尊法印、權別當濟尋法印著
 庇座、南第二以頭辨被申勸賞事、三方度、昇申於殿下也、前後度頭辨奉殿下仰、々
 左府退去、左府先召賴尊、近候、仰曰、依讓以弟子實覺法眼、敍給、府實覺、故、源、右
 次又召濟尋、仰曰、依讓以弟子法眼、覺信權大僧都、敍給、之、覺、信、殿、下、此間打
 餽餽、樂人奏樂、次供餽餽、諸大夫自南方傳取居之、折敷、次給祿、之、諸大夫、取、事、訖
 左府被仰曰、餽餽女可參御前、光季申云、公卿被參御前之後、件女參入、是常例
 也、仍人々被參御前、

先年行幸時、延久三、賴信、長昭等具三衣共參入、今日不具如何、又彼時給祿、

勸賞

各織物褂一重、今日不給之歟如何、

筵道興福寺儲之、自殿下片庇至御前行庇、唐衣、女用、山、階、寺、職、掌、人、女、云、々、泥、給
 廿具、裙帶、領巾、廿具、並、自、院、神、寶、所、以、榮、爵、任、料、所、課、給、自、餘、裝、束、著、片、庇、屋、訖
 褂單袴等私所具也、但、當、并、脂、粉、料、人、別、二、石、興、福、寺、所、給、也、云、々、著片庇屋訖、
 先是公卿著御前簀子圓座、殿下被仰曰、此座可敷何所乎、予申云、依行幸例可
 敷帖於砌、由所載式也、被仰曰、可改敷、余申云、石清水御幸還遊之時、敷圓座於
 宿院御所簀子、以件例不可被改、有事煩之故也、次樂人奏樂、河、水女隨樂打之、
 始遮扇、以片手打之、左府仰光季令置扇、以兩手打之、不供御、次祿、昇辛櫃於御
 所西、侍從取之給之、之、人、別、二、領、取此間一領紛失、仍重令給一領也、次寺家別當
 以下參入於御所南帳外、此間宗通朝臣參入、勅、使、明、日、可、參、歟、予、申、云、明、日、被
 俾國忌事云々、今夜可給歟、只、以、所候、簀子敷西第三間、予依仰給女裝束一具、
 候也、將稱勅使、可給祿歟、仍被隨歟、此間奏興福寺僧綱以下參入、由可給祿、由有仰、宗通朝臣下庭拜舞、此間公卿
 等皆出、仍無可取別當祿之人、仰曰、大納言等可取之云々、兩源大納言皆出、仍
 權大納言取賴尊祿、濟尋祿、予可取之、仍申殿下云、頗懸隔也、如何、殿下被仰曰、
 有何事乎、但中納言中將當可執之巡、而未執如此祿、最前取僧祿如何、申云、尤
 可然、亦左右可隨御意、仍予取之、以上、織物、領、次、永、超、覺、信、隆、禪、定、真、等、祿、殿、上、人

奏樂

興福寺僧
綱以下
祿ヲ給フニ

師實神人
祿ヲ給
フニ

取之、次已講四人、忠範行賢、永緣、賴嚴、以上白大褂、次五師五人、三綱七人、今不
參、但追給了、以上祿侍從取之、此間爲給勅使參議、掛被尋公實卿、可執經實卿
勅使、不候、仍遣使於宿所召之、此間予奏事由曰、興福寺御誦經事可差遣歟、仰
曰、早可遣之云々、後聞、遂不參入、爲家申其由、御寢已成、仍無沙汰而止云々、予
未聞左右之前退下於東院、

今日殿下給祿於神人等、又內府今日奉幣可忌乎否、服日限猶可及精進內
如何云々、予申云、公家奉幣時到散、春日有穢猶有被奉幣之例、不可忌歟、廿
一日內府御物忌也、而誦經於興福寺如何、尤可然、但物數若少者、不如於京
都近邊靈驗所如例被修、定綱朝臣去年十二月十九日卒去、仍殿下御服九
十日、可及今月十九日、仍今日入社頭給也、內府若用伯父法眼覺實去年十
二月十六日遷化、仍內府御服九十日、可及今月十六日歟、中納言中將、若用
義者、同前歟、

預信忠御
幸ノ賞ヲ
申請ス

及鷄鳴三聲退出於東院、聞曉鐘之聲、一春日預信忠愁申云、御幸時被賞神主
時經一人、不及預如何、預通宇治殿參詣時、被賞預不被敍神主、後日神主春日祝見
中臣殖栗、生所申事、可承悅給由、時經者大中臣、信忠仰云、可示關白、可隨彼左

右即申殿下、今日參給也、被仰曰、二條關白并自參詣時被賞候人由、○下文

○同條、八六八頁、春日社行幸歷代記ノ前、

〔院號定部類記〕

○三之四
彰考館所藏

帥大納言寛治七年正月十九日、丁酉、○中今夜於一院御方、有春日詣定云々、

右範時範寛治七年正月十九日、丁酉、天晴、○中殿下并爲一院司之輩、被率參一院御方、

依可有春日詣定也云々、○下

○五月十八日、最勝講ノ條、九四五頁、條末、

〔類聚世要抄〕

十一 五月五日 最勝講事

同曆記云、同七年、五月、七日、最勝講御請引來、

十六日、爲最勝講、早且自御社出、即上洛、船也、著宿小一條了、共伊□丸、二郎丸、
十八日、最勝講被始行證誠三人、大僧正良真、山座法印、權大僧都賴尊、山階法

印濟尋、同權別當、

開白講師勤仕了、

問者永順園梨山、

定

補遺 第三編之二 寬治七年五月

- 、、圓禪僧都 山
- 十九日、、隆禪僧都 興
- 、、慶僧律師 山
- 廿日、、實源律師 山
- 、、賢暹律師 山
- 廿一日、、定真律師 山
- 、、延真律師 興
- 廿二日、、明胤閣梨二會 山
- 、、永緣已講 興
- 廿五日、自京下向了、車
- 、、永原得業 東
- 、、應覺閣梨 山
- 、、行俊得業 興
- 、、林禪得業 興
- 、、俊圓閣梨 三
- 、、範經閣梨 三
- 、、真尊閣梨 山
- 、、定圓得業 興
- 、、範賢 三

昭和十四年三月十一日印刷
昭和十四年七月十日發行

(大日本史料第三編之九與付)

豫約價金七圓



編纂兼 發行所 東京帝國大學

印刷者 三秀舍 島 連太郎

東京市神田區美土代町十六番地

發行所 東京帝國大學 史料編纂所

東京帝國大學 文學部

電話小石川 (85) 七〇二三番 四〇二三番

寄贈

2892



21010

昭和十四年九月十四日
昭和十四年九月十二日

東京帝國大學

三島

東京

東京



